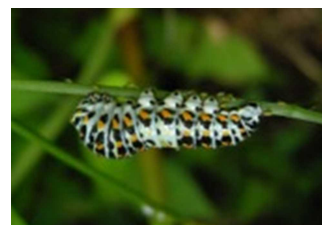


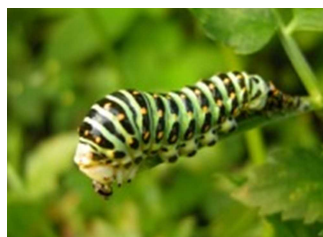
目立つ

1. キアゲハ幼虫

アゲハチョウによく似ていますが黒色部が少なく、全体が黄色く見えます。普通にいる種で、市街地でもよく見られます。毎年プランターのパセリの葉を幼虫に食べられて、成虫が来ていたことに気づきます。幼虫の食草がセリ科の植物なので、打吹山ではセリやシシウドで見ることができます。セリは谷筋に生え、シシウドは長谷寺の西口から上がった草地やみどり町側からの道沿いにあり、遊歩道では見られません。ミツバもセリ科ですが、打吹山で幼虫を見ていないのは、ミツバが樹下に生え、キアゲハの成虫の活動環境で



4 齢のキアゲハの幼虫



5 (終) 齢のキアゲハの幼虫

ないことが影響しているかもしれません。

幼虫は3齢までは鳥の糞状ですが、4齢になると目立ち始め、最後の5齢では黄緑と黒の縞模様となって非常に目立つようになります。警戒色といわれ、捕食者が避けることを目的としているのです。しかし、自身には毒がなく、臭角から独特の匂いを出すだけです。同じように派手な目立つ色彩で、大した毒もないのに鳥などに食べられず、たくさん見られるジョロウグモの例もあります。空脅しでしょうか。アゲハチョウの幼虫は、鳥の糞から葉の緑に擬態し、同じような匂いも出します。見かけは似た種でも近縁ではありません。人間でも嫌いな人もあるパセリやニンジンの匂いを、鳥など捕食者も嫌うのでしょうか。

2. ヒガンバナ

花だけでありながら、色と形態で存在を示します。葉はほとんど意識されていません。花後は葉を出し、周囲の植物の冬枯れの中で光を独占して強い繁殖力を示します。全体に毒を持つことが周知され、「シタマガリ」などと呼ばれて注意喚起されています。

稲作伝来時に中国から持ち込まれたのではないかといわれる史前帰化植物です。日本に入っているヒガンバナは3倍体（通常は2倍体、偶数でないとう殖細胞ができない）で結実しないため、繁殖はもっぱら球根の分球です。しかも球根が離れないので、かたまって増えていきます。全国の分布は、故意あるいは土と一緒に偶然人が移動させたと考えられています。したがって、打吹山では陸上競技場の周辺や公園、長谷寺のあたりと、人の手が入ったところに限られます。



地表近くでできた新しい球根

球根が土の中にあっても秋の彼岸にはきちんと開花します。季節を知るしくみは温度です。秋の気温低下で成長が促進されるからといわれています。球根が土中深くにあっては気温の変化がわかりませんので、土を被れば新しい球根の位置をさらに上方に移動させます。葉が枯れる前に球根を掘って見てください。左の写真のように、地表から10cmくらいの位置に新しい球根ができています。



ヒガンバナの群生



花後に伸びてきた葉